

配付資料 2：犠牲をささげ、エンダウメントを受けられるように助け合う聖徒たち

1845年11月30日、ブリガム・ヤングはノーブー神殿の中二階を奉献し、1845年12月10日以降、神殿のエンダウメントが施されるようになりました。

エラスタス・スノーは次のように回想しています。「12月12日、わたしと妻のアルティメシアは最初のエンダウメントの儀式を受け、その後は神殿内で働き、儀式を執行するように召されました。わたしは6週間ほど、十二使徒や同じように選ばれた人々とともに、神殿から出ることなく、昼夜を問わず働いて務めを果たしました。同じく妻も1か月ほど奉仕しました。」(“From Nauvoo to Salt Lake in the Van of the Pioneers: The Original Diary of Erastus Snow,” ed. Moroni Snow, Improvement Era, Feb. 1911, 285)

エリザベス・アン・ホイットニーはこのように綴っています。「わたしは自分自身と、自分の時間と関心をその使命にささげました。神殿が閉館になるまで毎日休むことなく働きました。」(“A Leaf from an Autobiography,” *Woman’s Exponent*, Feb. 15, 1879, 191)

マーシー・フィールディング・トンプソンは次のように記録しています。「わたしはヤング大管長に呼ばれ、神殿に住んで女性側の手助けをするよう言われました。わたしは頼まれたとおり、子どもも神殿に連れていき、昼も夜も働いたのでした。」(in Matthew S. McBride, *A House for the Most High: The Story of the Original Nauvoo Temple* [2007], 285)

ブリガム・ヤング大管長は次のように回想しています。「エンダウメントの儀式を受けられるのかと心配する聖徒が大勢おり、彼らに儀式を施す側のわたしたちも同じく不安を抱えていました。そのため、わたしは神殿で主の業を果たすことにすべてをささげました。昼も夜もほとんどの時間を神殿で過ごし、平均して1日4時間以上の睡眠を取らず、週に一度家に帰るための時間や機会もめったに取りませんでした。」(Brigham Young office files, Journal, Sept. 28, 1844 – Feb. 3, 1846, 101 – 102, Church History Library, Salt Lake City; spelling and punctuation standardized)

- こうした人々が進んで多大な犠牲を払い、自身のエンダウメントを受けられるよう人々を助けたのはなぜだと思いますか。
- こうした話から、犠牲についてどのようなことを学べますか。